

戦後詩史論 吉本隆明



後詩史論

吉本隆明



大和書房

戦後詩史論

一九七八年九月一五日初版発行

一九八一年九月三〇日九刷発行

著 者 吉本隆明

発行者 大和岩雄

発行所 大和書房

東京都文京区関口一―三三
郵便番号 一―一二

電話 (二〇三) 四五一一
振替 東京六―六四二二七

印刷所 信毎書籍印刷

製本所 東京美術紙工

装丁者 長尾 信

©1978 Takaaki Yoshimoto
著丁・乱丁はおとりかえします

1395-990600-4406

戰後詩史論

戰後詩史論——目次

戦後詩史論――5

戦後詩の体験――133

修辭的な現在――171

あとがき――267

索引

戦後詩史論 吉本隆明





戰後詩史論

戰爭詩史論

吉本隆明



大和書房

试读结束，需要全本PDF请购买 www.ertongbook.com

戰後詩史論

現代詩人のうち、とくにわたしの関心をひく、一群の詩人たちがいる。かならずしも、かれらが永年つかさねた詩作品の量や質によってでもなく詩的な嗜好が、合致するからでもなく文字どおり、詩人そのものに関心をよせる人々である。もちろん詩作品の内実によらず詩人の実体によって、関心の多寡をきめるのは邪道であるにはちがいない。けれど私見では、昭和初年から展開された日本の現代詩と、詩人たちの仕事は、作品の内容や質によってよりも、詩人である実体によってしかおし測れない問題を含んでいる。現代日本詩人全集（創元社）のなかで、はからずも中野重治が、おなじことを（？）扉のところにかいている。「今にたくさんの秀才が、これらすべてを理論づけようとして、必ず必ず苦しむだろう」。中野重治が「これら」ということで何を指そうとしたかは知らないし、わたしはもちろん秀才ではない。しかし現代詩を理論づけようとして苦しむのは、けっしてこの詩人の詩はロマンチックであるとか、この詩人の詩は、シュルレアリスチックであるとか、この詩人はレアリストであるとか、この詩人の詩は、メタフィジカルであるとかいうことではない。このことだけでは、中野のいうことはたしかである。またこの詩人は保守的だとか、進歩的だとかいうことも大したことでない。その種の評価ならば「たくさんの秀才」の仕事が既にあるし、わたし自身も以前にすこしかいたことがある。「必ず必ず苦

しむ」のはじつは、そういうところにはなく、詩としての理論づけが困難なところにあるのだ。そしておそらく、日本現代詩の特長は、そこから発生しているとしかおもいような源流が、その曖昧で混沌とした、詩として理論づけが困難なところにあるというところにある。

わたしが関心をひく一群の詩人たち、とはその困難さを背負っているような詩人を指している。たとえば、小熊秀雄であり、岡崎清一郎であり、山之口獺であり、草野心平であり、尾形亀之助であり、逸見猶吉であり、淵上毛銭であり、その他、無名のプロレタリア詩人たちである。そしてふたたび断っておくが、これらの詩人たちの詩作品自体に対してではなく、詩作品の背後に散見するものから、わたしが感受するものに関心をひかれるのである。

羈旅

日は西山に入り果てて

心細くも旅先思ふ

金銀は湧物なれや

やよや子よ

白々と月の明け離るるまで

茨の峠急ぎけり

旅人

汝カンシヤクもちの旅人よ

汝の糞は流れて ヒベルニアの海

北海 アトランチス 地中海を汚した

汝は汝の村へ帰れ

郷里の崖を祝福せよ

その裸の土は汝の夜明だ

あけびの実は汝の靈魂の如く

夏中ぶらさがっている

前者は岡崎清一郎の詩集『肉体輝耀』から、後者は西脇順三郎の詩集『Ambarvalla』からの引用である。いずれもべつに両詩人の代表作でも何でもない。岡崎の作品は、頭腦的ではなく、「胸」のあたりでかかっている。西脇の作品は、構成的で「頭」でかかっている。ここで抒情派だとかシュルレアリストだとかいう区分をまったく信用しないことにしよう。すると岡崎の作品のなかでも「金銀は湧物なれや」という詩句は、きわめて頭腦的なものであるし、西脇の作品でも「郷里の崖」とか、「夜明だ」とか「あけびの実」だとかいうコトバで喚起されているのは、

知的世界ではなく、原体験的な何かであることを理解するのである。わたしにいわせれば現代詩人たちは、主知的であれ、人生抒情的であれ、それほど異質のものを示してはいない。岡崎の「羈旅」でいえば「金銀は湧物なれや」という表現は、どこから生れたのか。西脇の「旅人」でいえば「あけびの実は汝の靈魂の如く」という表現はどこからでてきたか。文芸論的にいえば、これらの表現の問題は「象徴」語の問題である。したがって直喩、比喩、暗喩の問題である。しかしここで問題にしたいのは、これらの表現が「象徴」語であるために喚起されるあいまいさでなければ、多義性でもない。そのような地点で詩を評価することはさしあたってわたしの関心にはない。「金銀は湧物なれや」というような表現が岡崎の人生抒情のなかにでてきたり、「あけびの実は汝の靈魂の如く」というような表現が、西脇の主知的な作品のなかにでてきたりするのには、これらの現代詩人たちが自意識の及ばないところで、内的な「多義性」をもっているせいのおもえてくる。この「多義性」は論理的に言えば、これらの詩人が社会的な関係のなかで、曖昧さを空白として意識のなかにかくしているところからきていよう。しかしこの「多義性」は盲点としてばかりでなく、現代詩と詩人の特長として解釈することが必要なのだ。いくらか実証的な仮面をかりてわたしの関心をひく現代詩人をまず俎上にのせてみる。

職業歴

遍歴

小 熊 秀 雄

漁師手伝い、養鶏場番人、炭焼、
農夫、行商人、職工、記者

樺太、北海道、秋田、東京

岡崎清一郎 織物デザイン、会社員、貸本屋 東京、京都、足利

山之口 猯 行商、荷役、人夫、汲取屋、官吏 沖繩、東京

草野心平 不定職 福島、中国（旧支那）、東京

尾形龜之助 官吏、無職 仙台、東京

逸見猶吉 酒場経営、編集、会社員 東京、中国（旧支那）

淵上毛銭 下足番、人夫 東京、熊本

ここにあげた職業歴や遍歴などは、通りいっぺんのものですこしも実証的なものではないが、それは問わないことにする。現代詩人のうち、詩人としてわたしがとくに、関心をもつ幾人かは不定職業の日ぐらしをやり、その過程で、各地をはつきあるいた詩人たちらしいことを了解できれば足りる。これらの詩人がもともと、性格的なアウトサイダーで、社会的な関係や、社会秩序のなかで恒定的な職にありついて生活をすることをいさぎよしとしなかったか、またできなかったかもここでは問題ではない。客観的にいって、昭和初期の日本の社会が多量にうみだした不定職インテリゲンチヤの群のなかに、これらの詩人たちを埋めても大過はないであろう。それならば、昭和の日本の社会がうみだした、下層庶民社会にその日ぐらしの不定職を求めるインテリゲンチヤ群は、社会にたいし何をもたらし、どこへいったのだろうか。それを嚴重にさぐることはきわめて難しいが、すくなくともそのインテリゲンチヤ群は、わずかな露出岩の一つとし